

昨今の中國の脅威を前にして日米の絆は強化せざるべからず。されど第二次大戦中に米中間に醸成せられたる絆の未だ風化せず存するを忘るべからず。この後者の絆には日本國內にも同調する向きあり。

大戦の終結するに当たり米國は戦後の占領政策を確固たるものとすべく、米國の日本支配に利益を見出す勢力を育てこれを新しき日本の支配層となせり。戦前の日本において謂はば日陰の立場に在りし政治家、學者、評論家時を得て古き日本の全面的否定に走り、米國に協力す。彼等の思想的原點は東京裁判史觀及び新憲法なり。

新興國家勃興するに当たり國內矛盾を解決するため對外膨張政策をとることは古今東西その例枚擧に遑なし。これ謂はば物理現象に近く、歐米列強も過去にその經驗を有し、現に中國もその誘惑に驅られつつあり。倫理的是否を問ふべき種類のものに非ず。然るに第二次大戦においては勝者は敗者を惡と斷じ、その價值觀を受諾することを強要せり。遺憾ながら敗戦後既に半世紀を閱するも未だ多くの日本人はその呪縛下にあり。

戦前の日本と同じ道を歩みつある中國の威丈高になりて戦前の非を鳴らすに、米國はその潜在意識においてこれに同調する所なしとせず。

古き日本全面否定の思想は我國の正常化を妨ぐるのみならず、眞の日米同盟のためにならず。

先に「終戦のエンペラー」なる映畫を観る機會ありき。天皇の戦争責任をめぐるマッカーサー及びその副官フエラーズ准將の動きをテーマとせるものなり。東京裁判の論理によらば當然斷罪せらるべき天皇を訴追せざりしは優れて現實的かつ冷徹なる判斷に基くものなりき。現在の米國の政治家同レベルの高き政治的智慧和有さば、西太平洋地域における平和の將來につき案ずること更になし。